

「人間」から「ヒト」へ ～ボクたちの日本語選択論～

シンキング・バース
日本語研究班

「人間」止めても 「ヒト」は止めない

ホモ・サピエンスの個体や集合体を表す呼称は、日本語の場合、20世紀に入った頃から「人間」を用いる傾向が強くなりました。ボクたち自身、特に意識することなく、このことばを使い続けて来ました。しかし、ボクたちは3年ほど前から、「人間」の使用を極力避け、「ヒト(人)」と表記することを心掛けています。

ここでは、ボクたちがなぜ、そのように表記するかについて、それらの用法の時代的な変化を含めて、解説したいと思います。

●「人」という日本語

日本語の「ヒト(人)」は、和語に属する名詞です。平安時代の古和語にも使用例があり、今日的な“human being/mankind”の意味のほか、人称を表す“you(二人称)”や“he/she/they(三人称)”,あるいは、その人柄を表す“humanity”などの意味で用いられたとされています。主となる用法は、一人称(ボク/ワタシ)から見たホモ属に対する他者称で、個体にも集合体にも使われました。用法のちがいで多少のニュアンスのズレがあるとはいえ、近現代日本語と大きく意味が異なることが少ない和語です。

近代日本語における「人(ヒト)」は、福沢諭吉の有名な一節「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」にあるように、あえて「人間」とする必要がない用語でした。現代日本語でも、日常語で「あの人」「この人」「そこの人」のような使い方のほか、「人が良い/人が悪い」「人を見る目」「人のため」など、ごく一般的な使用法が数多くあります。



また、学術的な表記法としての「ヒト」は、生物学の分類用語などで、すでに定着している日本語です。ほぼホモ・サピエンスという意味です。ちなみに、ラテン語の“homo”は、原義では男性を指すため、英語の“human”も男性性が強いとされています。それに対して「ヒト」は、歴史的に男性を指す意味合いが多少あったとはいえ、性的な色合い(ジェンダー性)を弱めた理解が、十分に可能な用語です。

●「人間」という日本語の多義性

方、「人間」は、歴史的にみると、「ヒトマ」「ジンカン」「ニンゲン」という読み方があったとされています。

古和語の「人間(ヒトマ)」は、「ヒトとヒトの間にできた空間」のようなニュアンスのことばです。サッカーで言う、ディフェンスを掻いくぐる時のスペースのようなイメージかもしれません。「人間(ヒトマ)

を縫ってドリブル」は、選手と選手の間を巧みにドリブルするという意味になります。本来は仏教用語を漢字表記した用語で、「人の世」「世間」を意味するとされています。

その仏教用語の「人間」は、梵語（サンスクリット語）の漢字訳語で、漢音読み「ジンカン」と呉音読み「ニンゲン」があったとされています。漢字訳の妥当性は検証できませんが、「俗界」に近いニュアンスで使われたのかもしれませんが。その語を移入したのが、古和語の「人間」です。「愁ひを聞いては嘆く、これみな人間の習ひなり（『平家物語』）」は、読みを確定できないだけでなく、移入後の意味作用の変化を厳密には確定できないことばと言えます。

「人の世」「世間」の意味での「人間」を、近代日本語の創作に組み込もうとした一人に、福沢諭吉がいます。福沢は、“society”の翻訳に際し、「人間交際」という訳語を当てました。あえて「人間」としたのは、個々のヒトを表すためではなかったから、とボクたちは考えます。世俗空間のヒトとヒトとの交際が“society”だ、と福沢は言うのです。確かにこの訳語には、ヒト同士の繋がりやニュアンスが表されています。しかし、この訳語は一般化せず、「社会」が普及したため、“society”とのズレが生じました。

「人間」は、江戸時代から個人を表すことばとしても、使われるようになったとされています。しかし、「世間」の意味を払拭したのは、20世紀に入ってからです。読み方は「ニンゲン」が主流になり、「ヒトマ」「ジンカン」は、影を潜めました。個としての「ヒト」を、「人間（ニンゲン）」とした代表的な事例の一つが、太宰治の『人間失格』です。ここでの「人間」は、いわゆる“humanity”としての徳や慈愛や良識を兼ね備えたヒトという意味なのでしょう。その「人の道」を踏み外した主人公を、こ

の作品は書き連ねています。作品の文学的評価はともかく、ここでの「人間」は、今日的な「人間」と、ほぼ同義と言えます。

このように「人間」は、歴史的にみると、読み方の多様性と時代や用途ごとに多義性を備えたことばでした。

●ボクたちは「ヒト」を選択

ボクたちは、たいていの日本語文は、「人間」という表記を用いなくても、「ヒト（人）」という表記で十分に対応できると考えています。元来は多義的な「人間」より、より簡潔な「ヒト（人）」の方が、分かりやすく、日本語らしいと考えるからです。そのため、ボクたちの日本語文から、「人間」という表記をとりあえず抹消しました。

しかし、“humanity”の日本語訳（人間性）や日本国憲法の用語のように、課題が残る「人間」があります。他語変換が難しく、法的拘束力を持っていたりするため、手ごわい「人間」です。学術分野の「人間科学（human science）」のような用語も、他語変換が難しい「人間」かもしれません。

いずれにしても、ボクたちは「人間」を、厄介な日本語の一つと考えるようになりました。宗教的な意味での「俗界」のニュアンスが薄れ、真逆の意味で、ヒトの望ましい姿のようなニュアンスで「人間」が使われるようになると、「人間とは何か？」という哲学的な問いに突き当たります。哲学以前に、意味論としてズレが大きいその問いへの解は、必然的ですが、ありません。

ボクたちは、「人間とは何か？」と問うのではなく、「人間という日本語とは何か？」と問いました。その問いへのボクたちの解が、「人間からヒトへ」になったと言えます。

（2020年1月24日）

※参考にさせて頂いた書籍) 新村出編『広辞苑 第二版補訂版』(昭和57年、岩波書店)、中田紀夫編『新選古語辞典』(昭和44年、小学館)、岩崎民平/小稲義男監修『新英和中辞典』(1977年、研究社)、ジョーゼフ・T・シブプリー著、梅田修ほか訳『シブプリー英語語源辞典』(2011年、大修館書店)、水谷智洋編『改訂版羅和辞典』(2009年、研究社)、柳父章著『翻訳語成立事情』(1982年、岩波新書)、太宰治著『人間失格』(新潮文庫)

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断 「人間」から「ヒト」へ

2020年1月24日(初版)発行

著者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：シンキング・バース

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話/FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。